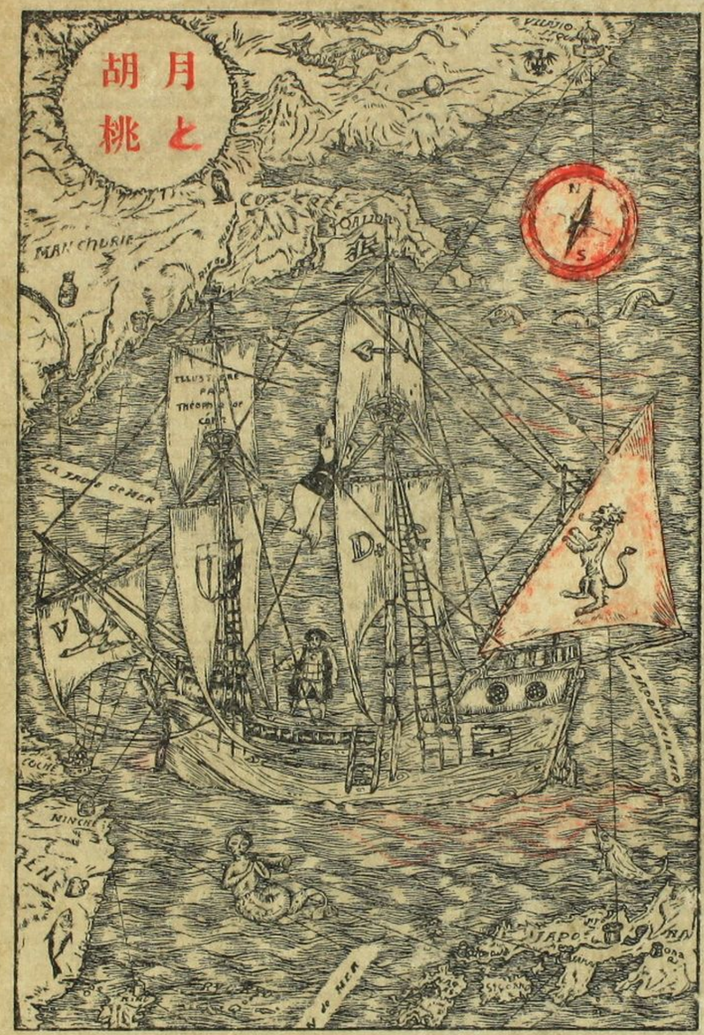
月と胡桃



童謡集

月と胡桃

北原白秋著

梓書房

¥4.50

月と胡桃

北原白秋著

梓書房版

童謡集

桃と月

北原白秋著

東京

梓書房

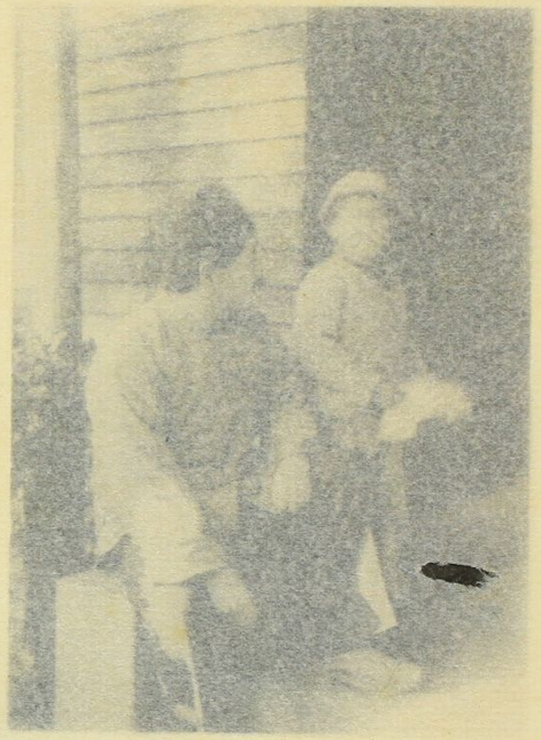
童謡集

桃と月

北原白秋著

東京

梓書房



序

かの月光の中にありて、香ひは胡桃の花と青く、けはひはよく眠る稚兒の寢帽(ナイトキャップ)にもまさりて白く、息づかしくあれ。

その聲はまた、新しい期待の明日(あす)への呼びかけともなるやうに。

麗質たぐひなき童(わらべ)こそ、まことに恵まれた る至上の幸であらうか。

わたくしは貧しい。齡四十を越えてもなほ、未だにわづかに保ちえて來た或る幼なごころを、ああ、或はただひたすらに磨き育むのみに過ぎないであらうか。

然しながら、かうした時、わたくしはいよいよ素直に還る。このわたくしのうしろに、いつも、わたくしは、永遠の母の目守りを感ずる。

つまりは、詩も歌も童謠も、わたくしにとつては同じく一つの氣禀の現れであつて、そ

のほかの何ものとも思はれない。

胡桃の花は青く、月の光よ圓かであれ。

昭和四年初夏

白　秋

目次

序

月と胡桃

獵季……三
蓮は……四
水のそば……六
月と胡桃……八
月夜の庭……一〇

月光曲……一二
月夜の波止場……一四
月　に……一六
月へゆく道……一八
白いもの……二〇
珊瑚樹……二二
落下傘……二四
月のひかりを……二五
青い魚……二六
まあるい丘から……二八
月の中から來る人……三〇
白いこだま……三二

月夜の仔馬……三四
白い列……三六
いびき……三八
月と帽子……四〇
ほういほうい……四二

イワンの家

道ばた……四七
遠い野原……四九
山のホテル……五二
お日和……五四
トラクタア……五六

楡のかげ……五八
修道院の前……六〇
修道院の裏庭……六二
サボウ……六四
ベル……六六
フォーク……六八
アイヌの子……七〇
紅あんず……七二
JÒÀK……七四
いたどり……七六
たうきび……七八
多蘭泊……八〇
海がらす……八二
安別……八四
敷香……八六
いぬのそり……八八
冬の日……九〇
イワンのお家……九三
樺太の春……九六

白樺の皮はぎ

白樺の皮はぎ……一〇一
追分……一〇三
二月……一〇六

三月……一〇八
てふてふ……一一〇
からまつ原……一一二
あしびの花……一一四
山の月夜……一一六
月と子供……一一八
からりこ……一二〇
演習の頃……一二二
寒い山……一二四
寒い林……一二六
落葉……一二八
ふとれよ、ふとれ……一三〇

山茶花……一三二
おたまじやくし……一三四
お月夜……一三六

鷗の塔

鷗の塔……一四一
足蹈み……一四四
さざなみ……一四六
霞のなか……一四八
日の出……一五〇
春の海……一五二
海の向う……一五四

まつばぼたん……一五六
沖……一五八
入江には……一六〇
ねこそぎ……一六二
さうらんえ……一六五
鼠のかげ……一六七
象の子は……一七〇

鷺の子

春の田……一七五
かへろかへろ……一七七
鶯姫……一八〇

煙草の花……一八四
ひきがへる……一八六
ひるねずみ……一八九
筑波……一九二
野つ原の夏……一九四
しろい馬……一九六
ひとりひとり……一九八
てくてく爺さん……二〇〇
お晩さん……二〇二
お嫁入り……二〇四
沼べり……二〇六
鴨と月……二〇八

霜の朝……二一〇
ねろり……二一二
草に寢て……二一四

花の週間

花の週間……二一九
薔薇……二二二
落ちたつばき……二二四
揚羽蝶……二二六
青梅……二二八
草いきれ……二三〇
野菜……二三二

露……二三四
お籠に……二三六
わらひます……二三八
りんご……二四〇
木の芽どき……二四二
とんろん……二四四
梢……二四七

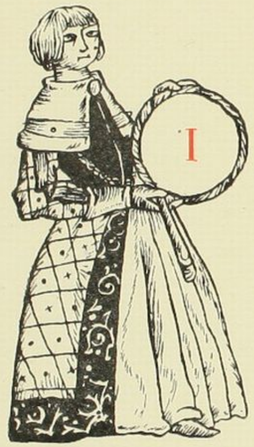
お母さま

凧……二五三
お母さま……二五四
白帝城……二五七

船のおはなし……二六〇
この道……二六二
からたちの花……二六四
牡丹……二六六
待ちぶせ……二六八
あのこゑ……二七〇
遊ばうよ……二七二
つばき……二七四
ゆすろ　ゆすろ……二七六
梨の花……二七八
蛾……二八一
お庭の夢……二八四

番號……二八六
ちひさな兵隊……二八八
夕かた……二九〇
秋の日……二九二
森君……二九四
お茶の實……二九六
傘のうち……二九八
藤の實……三〇〇
あけび……三〇二
窓ぎは……三〇四
椎の實……三〇六
夜中……三〇八

桃　胡　と　月



朝燒……三一〇
アンデルセンの晩……三一二
後記……三一九
作品年表……三二一

獵季

月は、梢を光らせる。
月は小さな角の月。
月は野末を煙らせる。
月に輕鴨飛んで來る。
月に火銃の火は赤い。
月は風より冴えてゐる。

漣は

漣は誰が起すの。
葦の根の青い鴨だよ。

鴨の首月をあびるよ、
みづかきがちらちらうごくよ。

くろい影なんでうごくの。
でこぼこの水の揺れだよ。

おや、鴨はどこへいつたろ、
波ばかりちらちらひかるよ。

ほいさうか、鴨が見えぬか、
あまり照る月のせゐだよ。

水のそば

葦の葉、葦の葉、うたひます。
まろい月さま
鶴の卵。

漣、漣、うたひます。
昴はちらちら
翡翠の卵。

子供が、子供が、うたひます。
葦笛吹けやい、
水ふえろ。

月と胡桃

月のひかりが窓に來て、
町のひびきをつたへます。

僕は胡桃をコツコツと、
小さい木槌でたたきます。

胡桃の花は青いんだ、
ね、さうですね、お母さん。

僕知つてるよ、函館の
圖書館の前にあつたでしよ。

石川啄木つて、父さんが
お友だちだと云ひました。

え、死んだつて、小母さんも、
家にお寫眞ありますか。

あ、お母さん、煙突に
月の光が照つてます。

月夜の庭

おお、明るいな、朴の葉に
月の朴の葉うつつてる。

みんなしづかだ、脚あげて
薄翅かげろふ飛ぶばかり。

ちやうど、母さん、この庭で
いつかかうしてゐましたね。

ちやうどかうして、腰かけて、
あ、おんなじだ、この話。

金のランプをとりに行た、
ほら、アラヂンのこの話。

墓が啼いてる。あの晩も
草がちらちら光つてた。

月光曲

眞珠いろしたうろこ雲、
ながれながれて、いい月夜。

すうと帆あげた。あれ御覽。
白い蛾のよなセエリング。

波、波、光れ、つぎつぎに、
海の向うの空までも。

風、風、かをれ、月夜には、
白いヨットが離れます。

月夜の波止場

ランチの煙突、じんじんと
煙あげてる、まつすぐに。

マストばかりだ、燈がついた
うへに黄いろなまろい月。

ぼうと鳴るのは港ぐち、
靄がこめます、ブイのそと。

なんときれいな、あの船室、
いつか見ました、ちらちらと。

『さよなら、ようい、
　さよなら、ようい。』

どこへ行たやら、あの蒸汽、
こんな月夜の白い船。

月に

ほそいはりがね、
無線塔、
月とお話してゐます。

月に火山がありますか。
海は、氷河はどんなです。
街は夜祭、アーク燈、

空氣はいい色してますか。
子供は……子供は……居りますか。
あ、さう、ねんねしてますか。

ほそいはりがね、
無線塔、
紫の靄立つてます。

月へゆく道

月へゆく道、
空の道。

ゆうかりの木の
こずゑから、

しろいお船の
マストから、

アンテナのさき。
夜露から。

月へゆく道、
光る道。

まっすぐ、まっすぐ、
青い道。

白いもの

月の中から飛んでくる
白い小鳥を見ましたか。

花の中から咲いてくる
白いにほひを見ましたか。

水の中から湧いてくる
白い狭霧を見ましたか。

歌の中から澄んでくる
白いひびきを見ましたか。

夢の中からさめてくる
白い光を見ましたか。

かはいい嬢さん、泣いたとき、
白い小鳥を見ましたか。

珊瑚樹

あの花はしろいさんごじゅ、
夢に見たしろい帆の船、
しろい船、月の夜の船、
きりころと音もしさうよ。

あの花はしろいさんごじゅ、
いつか見たしろいおうちよ。
しろい家、月の夜の家、

こどもらのこゑもしさうよ。

あの花はしろいさんごじゅ、
群れて來たしろい水鳥、
しろい鳥、月の夜の鳥、
雛鳥のこゑもしさうよ。

落下傘

月のなかから下りて來る
黄ろい絮雲、パラシュート

いえいえ、あれは鶴、
つうとお夢を持つてくる。

そうら、出た出た、お窓から、
光つた手ばかり、ビルデング。

月のひかりを

月のひかりを見てゐれば、
花の咲くよな音がする。

月のひかりに目がさめりや、
だれか來るよな聲がする。

あゝ、いいにほひ、おさかなの
香水をふく音もする。

青い魚

青い魚が呼んでます。
紅い魚が呼んでます。

今夜のお月さん、
十五夜さん。

お池の夕飯
めしあがれ。

香爐もほんのり
煙しましょ。

まあるい丘から

まあるい丘から
出た月は、出た月は、
とてもまあるい金いろで、金いろで。

まあるい月から
のぞく人、のぞく人、
とてもまあるい顔してて、顔してて。

まあるいお顔の
目の青さ、目の青さ、
とてもまあるくうるんでて、うるんでて。

まあるい目目から
出る涙、出る涙、
とてもまあるく落ちてくる、落ちてくる。

月の中から來る人

月の中から來る人は
びいどろ帽子、氷ぐつ。

白いつめたいマントには
雪がいつぱい、こなの雪。

月の中から來る人は
白鷺のよに寒いひと。

そうら、來た來た、お窓から。
夜なかにピアノがぽんと鳴る。

白いこだま

大きなピアノの
白いキイ、
月夜はつうつうつめたいな。

僕はお椅子に
匍ひあがり、
ぽんぽん、ぽんぽん、たたきまわる。

宙にぶらぶら
足と足、
猫がひつぱる、波斯猫。

ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、
白いキイ、
月の世界でこだまする。

月夜の仔馬

太鼓うちます、
おぼろ月、
仔馬がいつぴき駈けてます。
　てらたん、てらたん、まだ遠い。

靄がかけます、
白い路、
仔馬がひとりで駈けてます。

　てらたん、てらたん、まだ遠い。

月も薄雲、
紅の暈、
仔馬が耳たて駈けてます。
　てらたん、てらたん、まだ遠い。

太鼓うちます、
宵のくち、
仔馬がぽくぽく駈けてます。
　てらたん、てらたん、まだ遠い。

白い列

しろい帽子にしろい服、
みんな生徒だ、駈足だ。
　たったったっ、たったったっ。

ここは青山御所のうら、
しろい月夜のしろい列。
　たったったっ、たったったっ。

歌もうたはず、ものいはず、
阪を駈け駈け、まつすぐに。
　たったったっ、たったったっ。

しろい帽子にしろい服、
駈けてどこまで行くのやら。
　たったったっ、たったったっ。

しろい月夜のしろい列、
月の世界へ行くのやら。
　たったったっ、たったったっ。

いびき

そとは花園、いい月夜、
たんたんたたんと、となりから
水も來てゐる、とひのくち。

ぴいひやら、ぴいひやら、ひゅうひゅうひやらり。
お縁のしたに誰かゐて、
いびきかいてる、息してる。

月の光によく見たら、
黄ろいくちばし、孔ふたつ、
白い鵞がねねしてた。

月と帽子

長いお縁の
いい月夜、
誰か來てます、
ほう、白い。

うちの篁子だ、
よちよちと、
お手手ふりふり、

あかるいな。

硝子障子に
光る葉も、
ふかいみどりも
搖れてます。

おお、おお、白い
雪帽子、
月のひかりは
こぼれます。

ほういほうい

ほういほういと呼んでます。
誰か埠頭で呼んでます。

ほそい月出る
眞夜中に、

お目目あいてる
子はないか。

雲のきれめのすぐそこに、
青い四角な燈をつけた、
二本マストが泊つてる。

家のンワイ

道ばた

荒地野菊や、箒ぐさ、
きつい日ざしになりました。

誰かゆきます、影が來る、
太いステッキ、リュウクサック。

鳴けよ、馬追、この道も、
しんとしてます、どこまでも。

まづしいお小舍、箒ぐさ、
誰も見てゆく、このまへを。
誰も見てゆく、このまへを、
そして、とつとと行つちまふ。

遠い野原

遠い野原の
かしの木に、
かしの木に、
何か光がさしてます、
雲のひだひだ、金の虹。

遠いあそこへ
行く道は、

行く道は、
ひろい、ななめの赤い道、
誰か向うへあるいてる。

何の柵だろ、
あの杭は、
あの杭は、
さうだ、牧場だ、うれしいな、
ほうら、ゐるゐる、あめ牛が。
靄がたつてる、

あのさきに、
あのさきに、
ちりんからんと音もする、
遠い野原の金の虹。

山のホテル

山のホテルの幌馬車は、
いつもこはれた壁の前。
しめた戸口に
日がさして、
畫はゆがんだ影ばかり。

まづしいホテル、蔓の薔薇、
いつか見ました、道のそば。

あけた戸口の
紅ズボン、
誰かお客が出てました。

お日和

お日和、日和、牧場には
いつも蜻蛉が群れて出る。

廣いひなたのうまごやし、
犬は羊を追つてゆく。

夏は刈り頃、からすむぎ、
雲も野ずゑを湧きあがる。

掻けよ、草くづ、牧場には
いつも子供のこゑがする。

ねむれ、子供よ、日和には
いつも祭の笛が鳴る。

トラクタア

タタタタ、タタタ、トラクタア、
青い牧場をかけあがる。
花のつきたて、うまごやし、
雲にかけ入るトラクタア。
とても愉快だ、すばらしい、
人は草刈る、月寒。

丘から丘へ群れてゆく
牛と羊が豆のよだ。
タタタタ、タタタ、トラクタア、
夏は牧場をかけあがる。

註、トラクタアは草刈の機械です。人が乗つて駈けます。月寒は北海道札幌郊外にあつて、道廳のひろいひろい牧場のあるところです。

楡のかげ

楡の木のかげ、
いい芝生、
鐘は梢に吊つてある。

農科大學、
ひるやすみ、
みんな寢てゐる、涼しさう。

ここは札幌、
いまは夏、
風に　てふてふも光つてる。

お時間、お時間、
さあ起きた、
カララン、ランラン、鐘が鳴る。

修道院の前

こどもが、こどもが
はしゃいでる。
燕麥積む柵のまへ。

夏の日ざかり、
トラピスト、
馬車は野原を駈けて來る。

こどもが、こどもが
はしゃいでる、
晝のお彌撒の鐘も鳴る。

七面鳥よ、
七面鳥、
あかい爺さんなぜおこる。

修道院の裏庭

掃いてきよめた小徑には、
林檎のもみぢちりかける。

葡萄棚には鳩のこゑ、
ほろんほろんと呼びかける。

青いひとみの神父さん、
木履でこつこつ行きかける。

ちやうどおやすみ、晝の彌撒、
ベルが搖れます、鳴りかける。

牛と羊は野を越えて、
山の雜草食べかける。

サボウ

こつりこつりと、木のおくつ
のみでほつてる、足のあな。

こつりこつりと彫りかけて、
お手手いれてる、足のあな。

こつりこつりと日はながい、
春も毛ごろも、トラピスト。

こつりこつりと彫りあげて、
穿いて見てゐる、足のあな。

こつりこつりと、ほら、あるく、
白い樺の木のサボウ。

註、サボウとは木靴のことです。北海道のトラピスト修道院では修道者がこのサボウを作つて穿いてゐます。

ベル

ベルが搖れてる。
鳴つてゐる、
　月のひかりに見えてゐる。

わかい尼さま、
トラピスト、
　ここはお山の天使園。

かたむきかたむき、
ベルが鳴る。
　壁にゆれてるベルの影。

夜のお祈り
もう寒い。
　月の光も白うなる。

フオーク

大きなフォーク、
木のフォーク、
坊さんおひとり、
丘のうへ。

月が出ました、
によつぽりと、
坊さんのかげ、

大きいな。

黒い帽子の
廣いつば、
搔くは落穗の
からすむぎ。

空は夕燒
アンゼラス、
おやすみおやすみ、
またあした。

アイヌの子

大豆畠の
露草は、
露にぬれぬれ、
かはいいな。

大豆畠の
ほそ道を、
小さいアイヌの

子がひとり。
いろはにほへと
ちりぬるを、
唐黍たべたべ、
おぼえてく。

紅あんず

通りかかつた
山の道、
窓の障子は
閉めてある。

誰か子供の
ゐるやうで、
何も聲せぬ

お午です。

厩の横の
紅あんず、
手のとどくだけ
もいである。

J・O・A・K

蕗のはやしのかたつむり、
しろいおうちをたてました。

しろいおうちのかたつむり、
角のアンテナ出しました。

ここは樺太眞岡道、
馬の背よりも高い蕗。

角のアンテナ、かたつむり、
J・O・A・Kきいてます。

いたどり

いたどり、いたどり、
蟲くひ葉、
熱いひでりになりました。

いたどり、いたどり、
遠くには
馬車が駈けてる、ただひとつ。

いたどり、いたどり、
さみしいな、
髯のアイヌが笑つてる。

いたどり、いたどり、
蟲くひ葉
あかいお舌だ、熊の子だ。

たうきび

裏山で兄と弟よ、
たうきびを刈つてゐたとよ。
熊が出た、わうと出たとよ、
たうきびを採りに來たとよ。
たうきびはあかい毛だとよ、
波うつてさやりさやりよ。

そうら來た、熊はこはいよ、
そろそろと立つて來たとよ。
兄の子は死んだふりだよ、
弟は息もつかずよ。
熊はただ、嗅いで行たとよ、
たうきびをしよつて行たとよ。
この話、これでおしまひ、
たうきびを燒いてたべましよ。

多蘭泊

軒より高い向日葵は
十も出たよだ、お日さまが。

メノコ手をうて、月夜には
十も出たよだ、月さまが。

夏が來た來た、家のそと、
多蘭泊のアイヌ村。

メノコ手をうて、月夜には
十も出たよだ、月さまが。

註、多蘭泊は樺太の西海岸にあるアイヌの村です。
家のことをアイヌ語では「チセ」といつてゐます。

海がらす

蒼い月夜の崖のうへ、
あをい卵をひとつづつ
脚にはさんだ海がらす。

海ははるばる、霧の海、
島は岩島、海豹島、
崖はきりそぎ、海がらす。

親は蹴落す、育てよと、
あをい卵をひとつづつ
雹のふるよに音がする。

外は荒波、夜は凄い、
花の中から雛のころ、
生れましたと啼きたてる。

安別

海は韃靼、
夏の暮、
犬よ、のそりと、
出て見ぬか。

鰊乾場の
葱坊主、
鴉つついて、

啼かないか。

ここはお國の
北のはて、
赤い夕日も
もう寒い。

註、安別は樺太の西海岸にあるさびしい漁村です。ここに日露の國境標があります。

敷香

北から北から泣いて來た
ろしあの子供はかはいさう。
子供をつれつれ逃げて來た
ろしあの母さんさびしさう。
やつとこ一匹ついて來た
ろしあの牝牛もひもじさう。
子供は窓から目を出して

ちひさな向日葵見てゐるし。
母さん、はだしで、乳賣りに、
ちらちら耳輪に日が照るし。
牝牛は海見て、ねころんで、
ぼんぼん首筋たべてるし。
土人はオロチョン、ギリヤアク、
お魚ばつかり干してるし。

註、敷香は樺太の東海岸、幌内川の川口にある漁場です。

いぬのそり

あかいは
フレップ、
ななかまど。

ことりは
こまどり、
べにすずめ。

ふれふれ、
こなゆき、
こんこゆき。

ひきだせ、
のりだせ、
いぬのそり。

冬の日

熊の子、
乳のみ兒、
檻のなか。

アイヌの
メノコは
眼がくぼい。

山から
飛ぶのは、
鷲だろな。

まいにち、
大雪、
さむかろな。

アイヌの
父さん、
橇のうへ。

ホイヤ
ホイヤと、
駈けて出る。

イワンのお家

イワンのお家は
丸太小舍、
丸太小舍、
時計がコチコチ、
燈があかい。

イワンの母さん、
木の鉢で、

木の鉢で、
麥っ粉こねこね、
うたひます。

『冬が來た來た、
かはいいイワン、
　かはいいイワン、
ペチカ燃そかよ
黑パン燒こか。

おいで、牝牛よ、

スープも煑えた、
　スープも煑えた、
橇よ、吹雪よ、
ちりからこ。』

附記、場所――樺太小沼。

樺太の春

をどれ、馴鹿、
角のえだ、
オロチョン、オロチョン、
出ておいで。

雪が解けます、
ツンドラに、
裂けよ、氷よ、

川のへり。

あかい更紗の
頬かむり、
オロチョン、オロチョン、
出ておいで。

をどれ、馴鹿、
春が來た、
鷗も飛びます。
船も來る。

白樺の皮はぎ

註、ツンドラとは苔のつもつた地帶のことです。オロチョンとはそこに住んでゐるオロッコ族の土人のことです。

白樺の皮はぎ

白樺の皮をはがうよ、
春さきの山の林に。

灌木に鳴くはちやっちやだ、
ほら、枝に横を向いてる。

白樺の皮はくるりと、
手にはげばすぐに卷かるよ。

二輪馬車カタリコトリだ、
ほら、ちやつちや、じつと聽いてる。

白樺の皮はしろくて、
ぽちぽちと線があかいよ。

あのちやつちや、かはゆかつたな、
ほら、遠い溪で鳴いてる。

註、『ちやつちや』とはこどもの鶯のことです。

追分

からまつの林つづきに、
ぽつぽつと家があつたよ。
馬の繪馬、
門にかけてた。
白い馬、黑馬や、栗毛や。

追分の宿のはづれに、
ちよつぽりと石があつたよ。

お墓なの、
馬を祭つた。
死んだ馬、かはいそな馬。

旅びとは西へ東へ、
ほいほいと馬で行つたよ。
あかい日が
原を染めたよ。
小荷駄馬、幌馬車の馬。

からまつの林つづきに、

ぽつぽつと家があつたよ。

二月

氷柱にうつる朝の日も
ちらりきらりと冷いな。

懸樋のそばにさく花は
みつまたの花、冬の花。

温るめ、水口、お山には
青い嵩雀も翔るのに。

よごれ長靴、旅のひと
雪をよけよけまた來たに。

コトリ、トン、
まはれ水車よ、早よはずめ。

三月

あかい獨活の芽
砂かけて、
春の彼岸に掘りましよか。

蕨萠えたつ
野山には、
白いけむりも消えました。

フィルムの雨の
ふるやうに、
なにか、ちかちかする日には、

ひとつ橋越え、
また越えて、
ぼうんとお寺の鐘が鳴る。

てふてふ

てふてふ、てふてふ、
からまつ山は
まだ日が寒い。
　ちらちら飛べよ。

てふてふ、てふてふ、
三月四月、
霧雲はやい。

濡れ濡れ飛べよ。

てふてふ、てふてふ、
からまつ原は
もう芽が萠える。
　木ぶかく飛べよ。

てふてふ、てふてふ、
ちんころぐさも
林に赤い。
　大きく飛べよ。

からまつ原

からまつ原の
ちらちら薄日。

かばんをかけた
子供が通る。

泣きたいやうな
さみしい春だ。

どこかで、鳥が
ちっちと鳴いた。

あしびの花

あしびの花は白い花、
鈴なりの房、小さい房。

あしびの花の咲く頃は
山椒の魚もうまれます。

箱根、蘆の湖、塔ヶ島、
白い離宮の夜あけがた。

白いあしびの花折りに、
白いボートを漕ぎながら。

小さい宮さまおいでだと、
わたしの父さんいひました。

山の月夜

白樺の幹はしろくて、
月の夜の風にひかるよ。
お手手うて、
窓のこどもよ、
白樺の幹はしろいよ。

朴の葉のかげはひろくて、
月の夜の土にゆれるよ。

お手手うて、
そとのこどもよ、
朴の葉のかげはひろいよ。

月と子供

ほいほいほいよ、
お馬がとほる、
こどもが乗つて。

ほいほいほいよ、
こどもが消えた。
お馬だけとほる。

ほいほいほいよ、
朴の葉のかげが、
うしろからひかる。

からりこ

からりこと
音がしてるよ。
からりこは
下の谷間よ。

からりこの
窓は日和よ。
からりこよ、

菊のさかりよ。

からりこと
梭がはずむよ、
からりこと
こだましてるよ。

からりこよ、
誰か見えたよ。
からりこの
音がやんだよ。

演習の頃

茶の花、
咲く花、
畠の小道な。

茶の花、
よい花、
お日和、日和な。

茶の花、
散る花、
兵隊さんがチラリな。

茶の花、
茶の花、
電話線かけたな。

寒い山

ほうほうほうと寒い山、
あれは落葉松、枯れた山。

ほうほうほうと寒い山、
夕焼早い、すぐ暮れる。

ほうほうほうと寒い山、
きいと響くは製材所。

ほうほうほうと寒い山、
水力電氣の燈もついた。

ほうほうほうと寒い山、
ああもう暮れる、風が鳴る。

ほうほうほうと寒い山、
あれは落葉松、枯れた山。

寒い林

枯れた落葉松、白樺、
　ほうい、ほい、
寒い林になりました。

馬で驅けてく、赤上衣、
　ほうい、ほい、
あれはをばさん異人さん。

どちら向いても、これからは、
　ほうい、ほい、
くらい、くらい長い冬。

馬で驅けてく、赤上衣、
　ほうい、ほい、
とっととっとと、まだ見える。

落葉

落葉だ、落葉だ、
火のやうだ。
この丘、あの丘、野は遠い。
　きいてろ、きいてろ、
　角笛だ。

乗せてけ、乗せてけ、
空馬車だ。

革鞭ふりふり、そりや駈けた。
　ぴいぷう、ぴいぷう、
夕焼だ。

ふとれよ、ふとれ

ふとれよ、ふとれ、
七面鳥、
もうぢきおっつけ、
クリスマス。

とべよ、雪蟲、
月夜にも
遠いラッセル

うなります。

光れ、木星、
お窓には
白いお菓子の
塔も出た。

ふとれよ、ふとれ、
七面鳥。

山茶花

山茶花よ、
紅い山茶花。

山茶花を
風がちらすよ。

あの風は
寒い北風。

山茶花に
來たよ、鵯。

鵯が
ぴいと鳴いたよ。

おたまじやくし

おたまじやくしを食べに來る、
鷺は淺間の巣立ち鳥。

おたまじやくしの尾が切れりや、
ぢきに蛙になりましよか。

澤の氷もとけました、
芹もあをあを萠えました。

つくしんぼうや、つくしんぼう、
丘に誰かが呼んでます。

お月夜

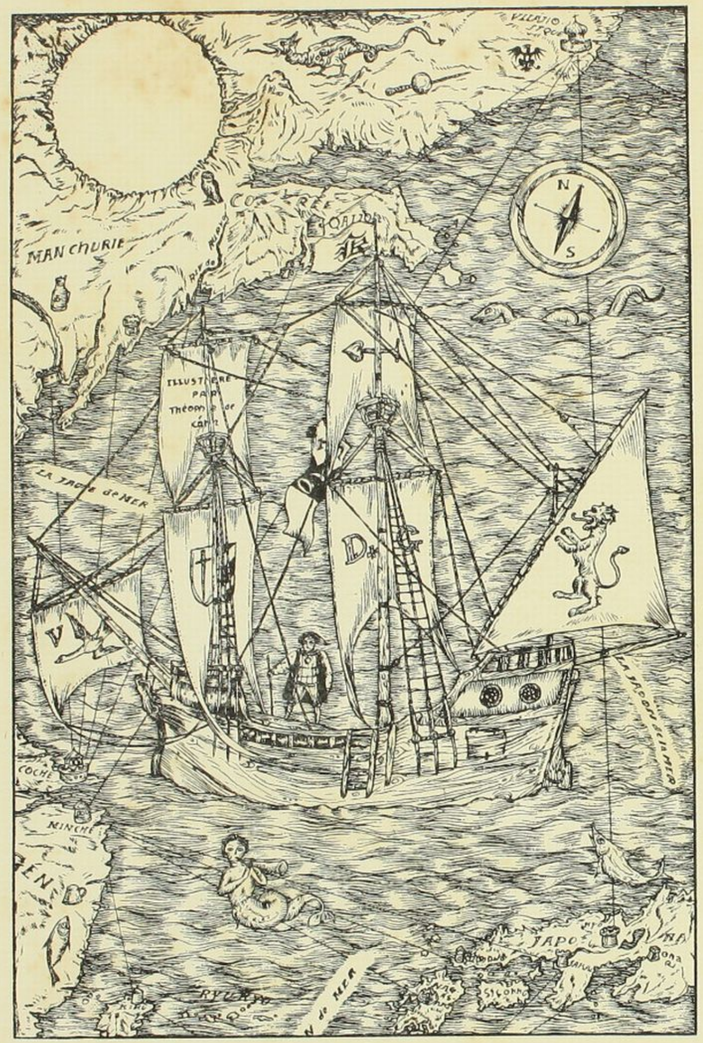
トン、
トン、
トン、
あけてください。
どなたです。
わたしや木の葉よ。
トン、コトリ。

トン、
トン、
トン、
あけてください。
どなたです。
わたしや風です。
トン、コトリ。

トン、
トン、
トン、

あけてください。
どなたです。
月のかげです。
トン、コトリ。

鷗の塔


MAN CHURIE
N
S
JAPO

鷗の塔

鷗の塔は
波のうへ、
葡萄ねずみの
空のうち。

鷗の塔は
白い塔、
舞うてあつまる

翅の塔。

鷗の塔は
沖の塔、
建てて、くづれて、
また建てて。

鷗の塔は
波のうへ、
葡萄ねずみの
空のうち。

鷗の聲は
風のした、
おぎゃを、おぎゃをで
月が出る。

足蹈み

足蹈みしてゐる、
僕たちは。

空にはながれる、
よい雲が。

海にはさざなみ、
ちらちらだ。

學校の外庭、
ひとまはり。

まはつて、足蹈み、
僕たちは。

山茶花咲け咲け、
鐘が鳴る。

さざなみ

さざなみよ、
銀のさざなみ。

ちららちら、
うごくさざなみ。

さざなみの
光る方から。

ほら、見てる、
みんな魚だ。

笑つてる、
目が光つてる。

青い空、
遠い沖から。

とんととと、
音もしてゐる。

霞のなか

霞がこめた、こめたよ、
春の野山にこめたよ。

頰白が鳴いた、鳴いたよ、
どこか梢で鳴いたよ。

みんなよ、行かう行かうよ、
波の音もしてるよ。

霞がこめた、こめたよ、
春の野山にこめたよ。

楢の芽も萠えたよ、
ステッキにいつか伐つたよ。

日の出

日の出は搖れる、
平たく、あかく、
大きく、まろく。
　わたしは起きて、
　御門をあける。

朝日が光る、
海からはづれ、

ずん〳〵あがる。
　朱紅だ、金だ、
　さざなみ染める。

天氣はよいな、
金の波の道が、
海から來てる。
　御門へとどく
　いつぽん道だ。

春の海

しづかな、ひろい、海の波、
海のお空のまろいすぢ、
春はかすんで、あかるくて、
いつも遠くで呼んでます。

どこまでつづく海の波、
波の向うの青い波、
とろんとろんと、お晝には

舟でなにやらたたきます。

そよそよ小風、潮の路、
こんな平なお凪には
すぐとわたれる氣がします。
立つてあるける氣がします。

とろんこ、とろんこ、とんとろり、
遠くの遠くで呼んでます。

海の向う

さんごじゅの花が咲いたら、
咲いたらといつか思つた
さんごじゅの花が咲いたよ、

あの島へ漕いで行けたら、
行けたらといつか思つた、
その島にけふは來てるよ。

あの白帆どこへゆくだろ、
あの小鳥どこへゆくだろ、
あの空はどこになるだろ。

行きたいな、あんな遠くへ、
あの海の空の向うへ、
今度こそ遠く行かうよ。

まつばぼたん

まつばぼたんの咲く頃は
いつもお日でり、夏休み、
誰もうれしい經木帽。

まつばぼたんの咲く門に
いつも干します、浮袋、
僕、はまいにち通ります。

まつばぼたんは黄や赤だ、
いつも泳ぎに行くときに
僕はこのまへ通ります。

まつばぼたんの、この門で、
いつも鳴ります、浪の音、
僕はここから走ります。

沖

船のロップの
ぴかぴかは、
小さいとんぼだ、
かはいいな。

むくりむくりと
湧く雲を、
沖で眺めりや

こひしいな。
小さいとんぼの
ぴかぴかよ、
空が青いな、
すずしいな。

入江には

入江には
鴨とさざなみ。

しろいのは
月とさんごじゅ。

この岸を
つたへ、こどもよ。

こめよ、霧、
こめよ、夕霧。

黄金蟲、
翅音たつるよ。

ねこそぎ

ねこそぎを
越すよ越すよ、さざなみ、
さざなみは沖へつづくよ。

ねこそぎを
飛ぶよ飛ぶよ、飛魚、
あの光る羽根は鰭だよ。

ねこそぎを
揺るよ揺るよ、お舟が、
ちやうどいま、まはるとこだよ。

ねこそぎを
越すよ越すよ、あの影、
朝っから雲がしろいよ。

ねこそぎを
見ろよ見ろよ、みんなよ、
モオタアの音もしてるよ。

註・ねこそぎは、海に張る網の一種です。海岸ちかくの入江などによく張るものです。

さうらんえ

さうらんえ、
さうらんえ、
さうらんえと曳かうや。
お祭の山車を曳かうや、
さうらんえとつづいて。
さうらんえと曳く子は

なんてみんなよい子だ。

さうらんえと曳く子を
おほめなされ、神さま。

おとほりなされ、神さま、
さうらんえと呼ばらう。

龍宮さんのお宮は、
さうら、海の前づら。

鼠のかげ

鐘がなります、
　ヂン　ゴン　ガン、
鼠がかけだす、そら、追へよ。

鐘がなります、
　ヂン　ゴン　ガン、
日ざかりゃこの坂てらてらだ。

鐘がなります、
ヂン　ゴン　ガン、
そらそら、ちよろりとちぢんだぞ。
鐘がなります、
ヂン　ゴン　ガン、
しつぽがぴかりと光つたぞ。
鐘がなります、
ヂン　ゴン　ガン、
鼠が蓬にはひつたぞ。

鐘がなります、
ヂン　ゴン　ガン、
牧師さんが窓から見てゐるぞ。

象の子は

象の子は
舟にのせられ、
大河を越すよ、東に。

象の子に
唐子むらがり、
大河を越すよ、夜あけに。

象の子は
紅い肩かけ、
大河を越すよ、朝日に。

象の子は
お經背なかに、
大河を越すよ、日和に。

象の子は
絮のやなぎと、
大河を越すよ、かすみに。

鶯の子

春の田

春の田に、
　春の田のお宮に、
のぼりが立つ、
　笹をつけたのぼりが。

ころろころ、
　ころろころ、のどかに、
田螺が啼く、

芹の下の田螺が。

鷺の子が、
　鷺の子が、　ふはりよ、
はぐれて來る、
　沼の靄をはぐれて。

吹けよ、笛、
　吹けよ、　笛、　子どもよ、
祭は明日、
　明日は祭、　朝から。

かへろかへろ

かへろかへろと
なに見てかへる。
　寺の築地の
　影を見い見いかへる。
『かへろが鳴くからかぁへろ。』

かへろかへろと
たれだれかへる。

お手手ひきひき
ぽっつりぽっつりかへる。
『かへろが鳴くからかぁへろ。』
かへろかへろと
なに爲てかへる。
葱の小坊主
たたきたたきかへる。
『かへろが鳴くからかぁへろ。』
かへろかへろと

どこまでかへる。
あかい燈のつく
三丁さきへかへる。
『かへろが鳴くからかぁへろ。』

鶯姫

鶯姫はいい聲で
いつも夕かた出て來ます、
谷の小川の星月夜、
著物すすぎに、水汲みに。

ケキヨ〳〵〳〵、ホウホケキヨ。

鶯姫の住む家は
山のひとつ家、草の屋根、

にほふ霞の、花のなか、
ひとの知らない雲のうへ。

ケキヨ〳〵〳〵、ホウホケキヨ。

鶯姫のお部屋には
金の引手の塗箪笥、
上のひきだし開けて見りや、
小さい苗床、絹の稗。

ケキヨ〳〵〳〵、ホウホケキヨ。

鶯姫は長者姫、

中のひきだし開けて見りや、
小さい畠に豆のひと、
群れてげんげの花を鋤く。

ケキヨ〳〵〳〵、ホウホケキヨ。

鶯姫はまだ少女、
下のひきだし開けて見りや、
小さい稻の田、千町田、
花ののりたて、穗ののみどり。

ケキヨ〳〵〳〵、ホウホケキヨ。

鶯姫は夢の姫、
若しか、覗き見、人來たら、
姫の姿も草の家も、
消えて幽かな雲のなか。

ケキヨ〳〵〳〵、ホウホケキヨ。

煙草の花

煙草の花の咲いたころ、
宮さまお成りになりました。

僕らはお迎へしてました、
自動車ぶうぶう駈けました。

煙草の花はうすあかい、
お眼鏡ちらりと見えました。

皇太子殿下萬歳と、
僕らは日の丸ふりました。

みんなが　わくわくしてました、
燕もついつい飛びました。

ひきがへる

うちのお庭のひきがへる、
いつも綠の露を吸ふ。
げげっ、げっげっ、くう。

誰も知らない草の奥、
晝も藥の香がします。
げげっ、げっげっ、くう。

金のお眼眼の藥劑師、
オンスコップは何グラム。
げげっ、げっげっ、くう。

絹の手ぶくろ、絹の靴、
レーンコートも貸しましよか。
げげっ、げっげっ、くう。

雨がはれます、ゆふかたは、
星もつけます、瓦斯ランプ。
げげっ、げっげっ、くう。

金のお眼眼の薬剤師、
オンスコップは何グラム。
げげつ、げつげつ、くう。

ひるねずみ

ちよろり、ちよろりこ、
ひるねずみ、
うつれ、お倉の
白壁に。
「こんこ小麥も米倉に、
さがせ、すずむぎ、はだかむぎ。」
ちよろり、ちよろりこ、

ひるねずみ、
あれは日のかげ
水のかげ。
「こんこ小麥も米倉に、
さがせ、すずむぎ、はだかむぎ。」

ちよろり、ちよろりこ、
ひるねずみ、
あがれ、川から
九十九ひき。
「こんこ小麥も米倉に、

さがせ、すずむぎ、はだかむぎ。」

ちよろり、ちよろりこ、
ひるねずみ、
けふはおやすみ、
みなお留守。
「こんこ小麥も米倉に、
さがせ、すずむぎ、はだかむぎ。」

註、いいいいとは日の照る時によく壁などにちらくする水の影のことです。

筑波

筑波の山のぶなの木に、
ぶなの木に、
きゃろ、けろ、ころと鳴くかへる。
もうぢき雨だ、雲が來る。

ああ、雨がへる、日和にも、
日和にも、
山は高いか、涼しいか、

ケーブルカアの音もする。

ぶなのみどりの木の枝に、
木の枝に、
きゃろ、けろ、ころと鳴くかへる。
ほら、また、雨だ、霧が立つ。

野つ原の夏

桐の畠の
桐の木に、
しいと鳴きたつ蟬のこゑ。

あつい日ざかり、
草いきれ、
汽車は豆汽車、原の中。

鳴けよ、しいつく、
ここいらは、
風にまくれる影ばかり。

あつい日ざかり、
誰やらが、
「雀の宮」と呼んでゐる。

しろい馬

しろい馬ひいて來た子が
あをぎりの幹をまはつた。

ひとまはり、はいよ、どうどう。
轡とり、ゆるりまはつた。

うれしいな、はいよ、どうどう。
手綱とり、幹につないだ。

しろい馬ひいて來た子は
シャツポとり、おじぎしました。

ひとりひとり

ちらちらと散るは竹の葉、
ひとりひとり
通ろ通ろよ。

山みちにひかる日のすぢ、
ひとりひとり
明れ明れよ。

しやんしやんと鳴るは瀬の音、
ひとりひとり
曲ろ曲ろよ。

さよならよ、さよな、さよなよ、
ひとりひとり
家へかへろよ。

てくてく爺さん

月は東に、日は西に、
てくてく爺さん、丘のうへ。

あかい頭巾に竹の杖、
しよつたお籠は、百合ばかり。

てくてく爺さん大きいな、
影が長いな、いつまでも。

丘はうねうね、草の丘、
ひとつ下りれば、またのぼる。

月は東に、日は西に、
てくてく爺さん、ほいよほい。

お晩さん

紅させ、
紅させ、
西のそら、
東は月夜になりました。

紅させ、
紅させ、
お晩さん、

お空の母さん、日が暮れた。

紅させ、
紅させ、
月夜には、
野鴨も飛びます、雲も出る。

お嫁入り

馬でおむかへ、お婿さん、
けふは袴、はいどうど。

牛で嫁入り、お嫁さん、
白い綿帽子、しったんたん。

村と村とのまんなかで、
空は月夜になりました。

牛にのりかへ、お婿さん、
扇ひらいて、しったんたん。

馬に鞍がへ、お嫁さん、
長い振袖、はいどうど。

嫁ぢや嫁ぢやと、子供たち、
あかい提灯ふりたてた。

はいしどうどう、しったんたん、
やんや、めでたや、ほうやほう。

沼べり

空のあかるい月夜には
鴨の飛ぶのが見えまする。

誰がうつやら、狭霧には
赤い火花がたちまする。

おおいおおいと、葦野では
船をよんでる聲もする。

じつに愉快だ、月夜には
土手が山より高うなり。

獵銃かついで、犬連れて、
大きな人かげ行きまする。

鴨と月

丘と丘とのあひだから、
鴨が出て來た、ぽつつりと、
　水は沼からひいた川。

またも出て來た、二羽三羽、
鴨は鈴鴨、青い鴨。
　ぽつりぽつりと浮いた首。

鴨が出て來た、九十九羽、
みんな出きつた、日も暮れた。
　あとは出て來ぬ沼の川。

丘と丘とのあひだから、
月が出て來た、まろい月。
　さむいお晩だ、ほう白い。

霜の朝

霜で、枯葦
まつしろだ。
輕鴨は飛び飛び
下りて來る。

僕は寒鮒
つりに行く。
母さん窓から

ながめてる。

ぽうと火を燃そ、
楊土手、
輕鴨は空から
のぞいてる。

ゐろり

土間の隅から
突っ込んだ。
丸太のさきが燃えてゐる。

ここは八丈、
大賀郷、
丸太のさきが燃えてゐる。

誰もゐませぬ
爐ばたには、
丸太のさきが燃えてゐる。

晝の日なかに
しんかんと、
丸太のさきが燃えてゐる。

草に寝て

雲はずん〳〵飛んでゆく、
雲は大きい白い鳥。

僕は寝てゐる、草の上、
荒地野菊の花のなか。

雲のつばさは明くて、
まるで光がふるやうだ。

白いつばさの、あのしたの、
ちやうど、あの下、あのあたり。

今はどこだろ、どこの町、
僕の知らない野っ原か。

雲はほんとにいいんだな、
いつも、どこへも、飛んでゆく。

僕の知らないどつかにも、
僕に似た子もゐるだろな。

週間の花

雲はずん〳〵飛んでゆく、
僕は寝てゐる、草のうへ。

花の週間

花は白芥子、月曜日、
日よけ、窓かけ、取りかへた
町の原つぱ、幼稚園。

火曜は赤い岩つつじ、
ペンキ塗りたて、丘のうへ、
高いラヂオの放送局。

露くさの花、水曜日、
螢ほうほう、日が暮れる、
染屋の裏の小溝川。

木曜の花、桑の花、
ちらちら綠、窓あけた
朝の寄宿舍、蘭くさい。

凌宵花、金曜日、
教會堂のうろこ雲、
港出る船ひとつない。

ぽんぽん苜蓿、土曜日だ、
空に株虹、雨あがり、
ぞろぞろかへる牧の山羊。

向日葵の花、日曜日、
みんな手に手に經木帽。
海の砂やま、脫衣小舍。

薔薇

薔薇は薄紅いろ、
なかほどあかい。
重ね花びら、
ふんはりしてる。

薔薇は日向に
お夢を見てる。
蟻はへりから

のぞいて見てる。

薔薇の花びら、
そとがは光る。
なかへ、その影、
うつして寝てる。

落ちたつばき

紅いつばきが、
ぽたりと落ちた。
すこしそつぽ向いて、
地べたにすわつた。
蕊が白くて、
つやつやしてる。
黄ろい花粉は、

いつぱい露だ。
落ちたつばきが、
見てるとうごく。
風がふつかけ、
籾がらつけた。

揚羽蝶

大きな大きな秋田蕗、
濡れてる、搖れてる、光つてる。
その葉に蝶々もやすんでる。

うまれたばかりだ、來てごらん、
あやめによく似た揚羽蝶、
お羽に折目がついてゐる。

大きな大きな秋田蕗、
揚羽はとまつてまた飛んで、
たんとは飛べずに吹かれてる。

青梅

青梅ころころ
草のなか。

むらさき露くさ
花ふたつ。

青梅ころころ
畑のうね。

かはいい、うすべに、
蕎麥の莖。

青梅ころころ
溝のふち。

あたまが三つ四つ、
雀の子。

草いきれ

ここは草むら、草いきれ、
いろんな葉つぱが蒸れてます。
荒地野菊や、箒ぐさ、
藜や、鈴麥、犬牛蒡、
鐵砲百合まで咲いてます。

あつい日ざかり、草いきれ、
いろんなにほひが蒸れてます。

蟻や、穴蜂、きりぎりす、
きらきら金砂、日の光。
萠黄の墓までむせてます。

ふかい草むら、青いきれ、
藥のにほひもして來ます。
石鹼や、磁石や、蠟マッチ、
ミルクや、ココアや、薄荷糖、
母さんの汗まで思ひ出す。

野菜

地面のしたからころげ出た
野菜のにほひはすばらしい。

大きな葉牡丹、球キャベツ、
中からみどりがはぢけます。

メロンは西洋の味がする。
黄いろいしづくがこぼれさう。

胡瓜の青疣、茄子の帯、
とても、もぎたて、むづがゆい。

麥稈帽には赤トマト、
てらてら跳ねます、ころげます。

地面のしたから湧いて出た
野菜のにほひはすばらしい。

サラダと青葱、夏大根、
朝からぷんぷんにほひます。

露

露はする〳〵のぼります。
　篠のほさきにうまれます。

露は搖れます、ふくれます。
　まろい、ゆらゆら、玉ひとつ。

露は落ちそで、あぶないな。
　だけど、はずんで、またふとる。

露はかはいいよい坊や、
　目鼻ついてる、笑つてる。

露は夜っぴて、夜あけまで、
　月の光をためてます。

お籠に

葱の根はしろいよ、
つやつやとしろいよ。
お籠に入れよ、葱の根、
お手手の指よりしろいよ。

蕎麥の莖はあかいよ、
ほろほろとあかいよ。
お籠に入れよ、蕎麥くづ、

お鳩の足よりあかいよ。

豆の蔓は長いよ、
ちらちらと長いよ。
お籠に入れよ、蔓ごと、
お靴の紐より長いよ。

わらひます

あかいな、あかいな、さるすべり、
いつもこの木はわらひます。

おゆびで、こちょこちょ、くすぐると
根から枝からわらひます。

ひかるよ、ひかるよ、さるすべり、
いつもこの木はわらひます。

くすぐるたんびに梢から
花がちります、わらひます。

りんご

林檎ころころどこへゆく、
お皿求めにまゐります。
　ころん、ころん。

林檎ころころ、どこへゆく、
ナイフ探しにまゐります。
　ころん、ころん。

林檎ころころ、どこへゆく、
フォーク拾ひにまゐります。
　ころん、ころん。

林檎ころころ、どこへゆく、
こども見つけにまゐります。
　ころん、ころん、

林檎ころころ、もういいの、
さあさ、坊っちやん召しあがれ。
　ころん、ころん。

木の芽どき

パンの
神さま起きられる。

朝は
雲から風が吹く。

鳴らせ、
角笛、夏の笛。

いまは
林の木の芽どき。

星は
螢のやうに飛ぶ。

とんろん

とんろん、
とんろん、
とんろん、
と、鳴る　音は
雨か、夜露か、ほら、はずむ。
とんろん、
とんろん、

とんろん、
と、鳴る　音は
あれは、小人のうつ太鼓。
とんろん、
とんろん、
とんろん、
と、鳴る　音は
黄いろいパピーの花のうへ。
とんろん、

とんろん、
とんろん、
と、鳴る音は
おめめさめよと　うつ太鼓。

註、パピーは『はなびしさう』のことです

梢

梢はいつも新しい、
梢は細くとがつてる。

梢は高い、どれ見ても、
梢は空につかへてる。

梢は見てる、背のびして、
梢は遠い向うまで。

梢は丘の青い塔、
梢は留める、鷺や鳩。

梢は早う目がさめる、
梢は朝の雲を呼ぶ。

梢は星を集めてる、
梢は月にすぐ光る。

梢に立てろ、アンテナを、
梢はラヂオ聽いてゐる。

梢は先に感じてる、
梢は雪を感じてる。

お母さま

風

風は窓かけあけに來る。
山の小鳥を連れて來る。

風はお窓に置いてゆく、
パンとポプラの葉をひとつ。

風はやさしい母さんの
朝のお聲を持つて來る。

お母さま

お母さまはよい方、
お月さまよ、みんなの。

お母さまはひとりよ、
たつた世界にひとりよ。

お母さまは木蓮、
白い氣高い木蓮。

お母さまはやさしい、
霧雨のやうにやさしい。

お母さまはせつない、
乾草のやうにせつない。

お母さまはあつたかい、
鶴のやうにあつたかい。

お母さまはうれしい、
國旗のやうにうれしい。

お母さまはこひしい、
お空のやうにこひしい。

お母さまはよい方、
ほんとうにいつもよい方。

白帝城

隆太郎に

白い小さな天主閣、
森はこんもり、丘のうへ。
（おぼえておいで、あの城を。）

空に半かけ、白い月、
雲はむらさき、夏の雲。
（おぼえておいで、あの月を。）

そして、帆かけて、矢のやうに
舟がゆきます、かるい舟。
（おぼえておいで、あの舟を。）

日本ラインの瀬は早い、
猿が啼きます、きりぎしで。
（おぼえておいで、この川を。）

うるしの花や合歡の花、
パパと旅したこの夏を。
（おぼえておいで、この夏を。）

白い小さな天主閣、
白くかがやけ、その夢に。
（おぼえておいで、いつまでも。）

船のおはなし

船のケビンの戸口には
みんなの名まへが書いてある
お客の名まへが書いてある。
　ねえ、さうですね、お母さん。

ぼぼん、ぼぼんと食事には
ボーイか鐵琴鳴らしてく、
お腕の鐵琴鳴らしてく。

　ねえ、さうですね、お母さん。

いいな、汽船は　もこもこと
煙はきます、煙突で、
まろい大きな煙突で。
　ねえ、さうですね、お母さん。

港、さんばし、ブイのそば、
ぼうと汽笛がひびきます。
とても汽笛がひびきます。
　ねえ、さうですね、お母さん。

この道

この道はいつか來た道、
　ああ、さうだよ、
あかしやの花が咲いてる。

あの丘はいつか見た丘、
　ああ、さうだよ、
ほら、白い時計臺だよ。

この道はいつか來た道、
　ああ、さうだよ、
母さんと馬車で行つたよ。

あの雲はいつか見た雲、
　ああ、さうだよ、
山査子の枝も垂れてる。

からたちの花

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。
青い青い針のとげだよ。

からたちは畑の垣根よ。
いつもいつもとほる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。
まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。
みんなみんなやさしかつたよ。

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

牡丹

ぼうたんよ、
ぼうたん。
靄がふかい。靄から
誰か呼ぶよ、ほほほうい。

ぼうたんよ、
ぼうたん。
靄がふかい。山から

子らが來るよ、ぞめいて。

ぼうたんよ、
ぼうたん。
靄がふかい。朝から
ほうら呼ぶよ、ほほほうい。

ぼうたんよ、
ぼうたん。
靄があかい。靄から
犬のころもしてるよ。

待ちぶせ

誰かゐる。
誰かゐる。
春はぼかぼか、霞んでる。

誰かゐる。
誰かゐる。
菜の葉、菜の花、霞んでる。

誰かゐる。
誰かゐる。
雲雀、綿雲、霞んでる。

誰かゐる。
誰かゐる。
畦が、向うが、霞んでる。

誰かゐる。
誰かゐる。
いつも待ちぶせ、かくれてる。

あのころ

『もういいよ』
『もういいよ』
野山の、野山の、白うつぎ、
白うつぎ、
どこかで、あの子が、呼んでゐる。

『もういいよ』
『もういいよ』

きのふの、きのふの、かくれんぼ、
かくれんぼ、
いまでも、どこかで呼んでゐる。

『もういいよ』
『もういいよ』
月夜の、月夜の、白うつぎ、
白うつぎ、
そこらに、あの子が、かくれてる。

遊ばうよ

『遊ばうよ、遊ばうよ。』
ほうら、來てゐる、よんでゐる、
たれかこどものこゑがする。

『遊ばうよ、遊ばうよ。』
日より、お日より、ひるすぎは、
たれか、靄から呼びにくる。

お庭の、お庭の菊のはな、
なにかあかるいお日よりは
なにかさびしいお日よりは。

『遊ばうよ、遊ばうよ。』
いつもたれかがよびにくる、
いつも裏からよびにくる。

つばき

『お、お、花だ、
白いつばきだ。』
『あら、お早う、
お目がさめたの。』

『つぶつぶだ、
露がついてる。』
『今朝ふつた、

雨のしみでしよ。』

『寝てる間に、
誰が活けたの。』
『知らないわ、
お母さまでしよ。』

ゆすろ　ゆすろ

ゆすろ、ゆすろ、みきを、
あかい　あかい　はなを。
ゆれろ、ゆれろ、たかく、
あかい　あかい　つばき。

いつか、いつか、ここで、
はふった　はふった　ナイフ、
どこだ、どこだ、みせろ、

あかい　あかい　つばき。

ゆすろ、ゆすろ、とても
あかい　あかい　はなだ。
おとせ、おとせ、ナイフ、
あかい　あかい　つばき。

梨の花

梨の花だよ、
しろいのは。
　ほら、あのうちだ、
　僕の家。

ああ、母さんだ、
『お母さん。』
　ほらよく、見えよ、

あのお窓。

いつも呼ぶんだ、
ここらから、
　ほら、見てるだろ、
　僕の方。

母さん待つてる、
きつと、さう。
　ほら、きこえたよ、
　また見てる。

梨の花だよ、
しろいのは、
ほら、光ってる、
咲いてゐる。

蛾

蛾ですね、母さん、ほうら、この粉、
まるで鐵砲百合の花粉見たいだ。
おや眉があるんだな。笑つてるやうだな。
おや、お翅は立てないんだな、飛行機みたいに。
お、さうだ。昨夕も、こいつだ、こいつだ、
そら、この硝子戸の向うでばたばたやつてゐた

のは。

生れたばかしだな。飛べないんだな。玩具のやうに、

せんまいじかけのお腹だといいんだがな。

飛んだ。飛んだ。ふとつちよが飛んだ。

滑走なしで、ふはりとあがつた。うまいなあ。

大きな蛾だなあ。空いつぱいに光つてゆくよ。

あ、あ、お隣へ飛んでつた。どんな庭だらうな。

母さん、あがつて見ていい、この石塀に。

やつ、チウリップだ。チウリップだ。赤だ。赤だ。

赤だ。

お庭の夢

白いベンチにねんねすりや、
誰か小聲にのぞきます。
『いい子だ、いい子だ、よく似てる。』
『いえいえ、この子はおうちの子、
かはいい　かはいい　わたしの子。』
むせて苦しい椎の花、
白いお羽根でひっつつむ。

『この子は、この子はもらつてく。』
『あっあっ、早よ來て、お母さん、
誰だかわたしをさらつてく。』
白いベンチに目がさめりや、
白いスワンが來たばかり、
おうちだ、おうちだ、いい芝生、
レースがゆれます、ひかります
お窓に母さん見えてます。

番號

番號呼びます、丘のうへ、
一、二、三、四、五、六、七。

いまは花どき、おぼろ月、
靄に青いは梨、李、

番號呼びます、向うでも、
一、二、三、四、五、六、七。

だれが歩哨に出るのやら、
いくさごつこの銃に劍。

ころころころころと、宵のくち、
水に田螺も啼くやうな。

番號呼びます、靄のうち、
一、二、三、四、五、六、七。

ちひさな兵隊

ちひさな兵隊、歩兵隊、
「氣をつけつ。」牡丹の花が咲く。

ちひさな兵隊、「ささげ銃」
お日さまごきげん、ありがたう。

ちひさな兵隊、ランドセル、
「右向け。」霞に鐘が鳴る。

ちひさな兵隊、「になへ銃」
向うに白いは噴水塔。

ちひさな兵隊、「前へ、おい。」
蝶々についてけ、そら進め。

ちひさな兵隊、お一二、
この道、ポプラの並木道。

ちひさな兵隊、「まはれ右。」
朝鮮鶯がねねしてる。

夕かた

くちなしの花は矢ぐるま、
吸つて吸つて駈けて行きましよ。

くちなしの花をもぎれば、
すぐ家のまがり角なの。

チャルメラのこゑもしてくる、
夕かたの街になります。

ね、テニス、今日はよかつた。
あのサーブ、うまく行つてよ。

秋の日

ここだ、ほら、ちやうどここらに
をみなへし咲いてゐたつけ。

さうだ、そだ、蟲か、なんだか
きよつきよつと鳴いてゐたつけ。

あそこだよ、牛がゐたのは、
あつたかい、いい日だつたよ。

母さんが何か言つたよ、
何だつけ、忘れちやつたよ。

白い胡麻干してあつたよ、
黑い胡麻干してあつたよ。

森君

あのときは
なにかしてたよ、
なにか花咲いてゐたつけ。
『さよなら』と森が呼んだよ、
あったかい野道だつたよ。
父さんと、伸だつたよ、

もういちど、帽子ふつたよ。
『さよなら』と、僕もいつたよ、
それつきり、それつきりだよ。
ガードでは　かかんかかんと、
鮮人が工事してたよ。

お茶の實

お茶の實は
お手に九つ、
あさがほの
たねも九つ。

ばらのはな
もろたお禮に、
おとなりへ

もつてゆかうよ。

『をばさま』と
よんでみようか、
『ねえさま』と
よんでみようか。

ああ、さうよ、
うらの木戸から
『お早う』と
かけてゆかうよ。

傘のうち

蛇の目、番傘、柄のない傘を、
だれか並べた、すぼつと立てた。

ひなた廣つば、柄のない傘を、
いくつ干したぞ、九十九とひとつ。

蛇の目、番傘、柄のない傘に、
だれかゐるよだ、しやがんだ子供。

傘は照る照る、柄のない傘に、
みんなゐるゐる　九十九とひとり。

『もういいよ、
　もういいよ。』

菊は白菊、傘屋のおひる、
聞いた聞いたよ、にほひがしてる。

藤の實

お日々さめればよその庭、
昨夜お客に來たお家、
母さま、母さま、あら、雨よ。

雨は霧雨、秋の雨、
お顏洗つて、手手拭いて、
母さま、母さま、あれはなに。

あれは藤の實、藤の棚、
うちのささげによく似てよう、
孃やよ、孃やよ、搖れてませう。

春の祭に來たときは
白と紫、ながい房、
今は莢の實、雨ばかり。

あけび

あけびの棚の
あけびの實、
圓い、小さな
實よ、ふとれ。

雨、雨、かかれ、
葉にかかれ、
蔓はお窓に

はひかかれ。

あけびの棚は
ドアのうへ、
人が見えれば
ベルが鳴る。

あをい、すずしい
あけびの實、
だれか　おはやうと
來ないかな。

窓ぎは

秋の夕かた
もう寒い。
リンデンの葉も
散りかける。

あかい西日に、
窓ぎはで、
母さん編もの

さみしいな。
百舌が啼いてる、
どこかでは。
僕は豆柿
かぢつてる。

硝子のかげも、
戸の桟も、
壁にくつきり
映つてる。

椎の實

きのふ、　お宮の裏山で、
椎の實ひろうて居りました。

誰か知らないおねえさま、
どこのお子かとききました。

やさしいやさしいおねえさま、
じっとわたしを見てました。

夕日は空を染めました。
小鳥のこゑもしてました。

坊やひろうてあげましょと、
明日もおいでとおつしやつた。

お母さまではないかしら。
お母さまではないかしら。

夜中

おうちの寢間で
わたしは寢てた。
あかりが點いて
人ごゐしてた。

見知らぬ部屋に
わたしは寢てる。
あかりが點いて

人ごゐしてる。

どこだか知らぬ、
誰だか知らぬ。
あかりが點いて
人ごゐしてる。

朝焼

朝焼よ
咲けよ、すももよ。

鵲は
草に下りるよ。

雨がすぐ、
すぐにふりそだ。

青馬車よ、
かけろ、その幌。

お姉さま、
さよな、さよなよ。

アンデルセンの晩

1

わたしは月夜の鶴
夜になりやおぎやぁと連れて行こ。
　小父さん、小父さん、アンデルセン。

2

どこかに赤ちやんいらないか。

わたしは墓の子氣がきつい、
あたまに寶石はめてゐる。
　小父さん、小父さん、アンデルセン。
三つ子のたましひ見ておくれ。

3

わたしは蝸牛、白い家、
となりの蝸牛、黒い家、
　小父さん、小父さん、アンデルセン。
牛蒡も林になりました。

4

わたしは小さな薔薇の鬼、
なんでも見てゐる、聽いてゐる、
小父さん、小父さん、アンデルセン。
いつでもお日さんぴかぴかだ。

5

わたしは甲虫の甲蟲、
空から空へと旅してく。
小父さん、小父さん、アンデルセン。

とつても世界はうつくしい。

6

わたしは赤靴、をどり靴、
をどれや をどれ と飛んでゆく。
小父さん、小父さん、アンデルセン。
畠も牧場も飛び超える。

7

わたしは莢まめ、ゐんどまめ、
はぢけてころげりや、苔のした。

小父さん、小父さん、アンデルセン。
芽が出て、花咲き、また實る。

8

わたしは醜い、鵞の子、
つつかれ、つつかれ、水の上。
小父さん、小父さん、アンデルセン。
いついつスワンになれますの。

9

わたしは貧しいマッチ賣り、

凍えて夜っぴて雪のうへ。
小父さん、小父さん、アンデルセン。
マッチの燃しくづあかるいな。

10

わしらは夢見る、駈けまはる、
子供はたましひをどつてる。
小父さん、小父さん、アンデルセン。
今夜もお話しておくれ。

後記

香ひあるすぐれてめでたきものへ向つて、わたくしたちの童謡の道は開かれてあらねばならぬ。童謡も詩であるからである。

わたくしの童謡が齊しく童心童語の歌謡として整へられてはあつても、その歌謡はいつとなく詩の一義へ進みつつあることを、わたくしは自ら否みはしない。

この『月と胡桃』の童謡はさうした心の高まりを示してくれるであらう。選むにわたくしはその心を以てした。兒童たちのみならず寧ろ少年以上の成人たちにも見てほしい集の一つとして、この近代に贈りたいと念ふのである。

わたくしは曩にいくつかの繪入童謡集を公にした。しかもその後の數百の作品の中からこの種の集に收むるにふさはしいと思へるものを、ひと先づここに選んで見た。ただ「か

らたちの花」一篇のみは、或る同じ系統の源を成すものであるゆゑ、前集『子供の村』から特に抄して之に加へることにしたのである。

より幼なきもの、土俗、或は近代科學風景の多くは、主として他の繪入童謡集のために後に遺したことも知つていただきたい。ただ小引としてそれらの二三は挿んで置いた。

童謡をただに單なる幼なぶりとし、深くは味はずして、詩以下と看る向きも未識であるが、かの純情の童謡をさへも濫りに瀆して恥

無き市井の行爲も寂しまれる。

しかもなほ兒童たちは正しく觀つつある。

成人たちも時には思を自己の童心に潜めてほしいものである。

作品年表

大正十三年

七月……からたちの花（赤い鳥）
十月……鴎の塔（赤い鳥）
十月……ほういほうい（赤い鳥）
十一月……椎の實（赤い鳥）
十二月……藤の實（赤い鳥）
十二月……いびき（赤い鳥）

大正十四年

一月……日のくれ（コドモノクニ）
三月……つむぎぐるま（赤い鳥）
三月……蕗の臺（赤い鳥）
四月……てふてふ（赤い鳥）
四月……待ちぶせ（赤い鳥）
四月……かへろかへろと（童話）
六月……あしびの花（赤い鳥）
六月……夜中（赤い鳥）
七月……揚羽蝶（赤い鳥）
七月……青梅（コドモノクニ）
八月……青い魚（赤い鳥）
八月……野菜（赤い鳥）

九　月……草いきれ　（赤い鳥）
十　月……煙草の花　（コドモノクニ）
十一月……イワンの家　（赤い鳥）
十一月……北の海　（赤い鳥）
十二月……落　葉　（赤い鳥）
十二月……アイヌの子　（コドモノクニ）
十二月……冬の日

花の週間　（五月十四日作　未發表）
アンデルセンの晩　（十月一日　アンデルセン百年祭のために作）
窓ぎは　（十月二十二日作　可愛い藝術）

大正十五年

一　月……からまつ原　（赤い鳥）
一　月……演習の頃　（赤い鳥）
一　月……お月夜　（赤い鳥）
一　月……足踏み　（赤い鳥）
一　月……霜の朝　（少年倶樂部）
二　月……さざなみ　（赤い鳥）
二　月……安　別　（赤い鳥）
二　月……敷　香　（赤い鳥）
二　月……薔　薇　（赤い鳥）
三　月……つばき　（赤い鳥）
三　月……おたまじやくし　（コドモノクニ）
六　月……日の出　（赤い鳥）
六　月……蛾　（女性）
七　月……楡のかげ　（赤い鳥）
七　月……お晩さん　（赤い鳥）
八　月……この道　（赤い鳥）
八　月……いたどり　（赤い鳥）

八　月……まつばたん　（幼年倶樂部）
九　月……たうきび　（赤い鳥）
九　月……お日和　（少年倶樂部）
九　月……わらひます　（幼年倶樂部）
十　月……獵　季　（女性）
十　月……草に寢て　（赤い鳥）
十　月……露　（赤い鳥）
十　月……J・O・A・K　（コドモノクニ）
十　月……紅あんず　（少女倶樂部）
十一月……水のそば　（女性）
十一月……月と胡桃　（女性）
十一月……月夜の庭　（赤い鳥）
十一月……月光曲　（コドモノクニ）
十一月……お嫁入り　（赤い鳥）
十二月……月と帽子
十二月……ふとれよ、ふとれ　（コドモノクニ）

昭和二年

一　月……いぬのそり　（幼年倶樂部）
一　月……沼べり　（少女倶樂部）
一　月……ゐろり　（赤い鳥）
一　月……風　（少女倶樂部）
二　月……象の子は　（赤い鳥）
三　月……月夜の仔馬　（赤い鳥）
三　月……樺太の春　（赤い鳥）
三　月……漣　は　（女性）
三　月……鷺　姫　（女性）
三　月……夕かた　（少女倶樂部）
四　月……落下傘　（婦人公論）
四　月……まあるい丘から　（婦人公論）

四月……月のひかりを（婦人公論）
四月……月の中から來る人（婦人公論）
四月……ベル（婦人公論）
四月……フォーク（婦人公論）
四月……多蘭泊（婦人公論）
四月……月とこども（婦人公論）
四月……白樺の皮はぎ（赤い鳥）
四月……寒い山（赤い鳥）
五月……白いもの（少女倶樂部）
五月……トラクタア（赤い鳥）
五月……サボウ（赤い鳥）
五月……番號（女性）
五月……ちひさな兵隊（コドモノクニ）
六月……白いこだま（赤い鳥）
六月……追分（赤い鳥）
六月……野つ原の夏（赤い鳥）
七月……山のホテル（赤い鳥）
七月……山の月夜（幼年倶樂部）
七月……鼠のかげ（赤い鳥）
七月……てくてく爺さん（赤い鳥）
八月……沖（赤い鳥）
八月……しろい馬（赤い鳥）
八月……ひとりひとり（赤い鳥）
九月……修道院の裏庭（婦人の友）
九月……海の向う（赤い鳥）
九月……白い列（赤い鳥）
十月……白帝城（赤い鳥）
十月……月夜の波止場（赤い鳥）
十一月……遊ばうよ（幼年の友）
十一月……あのとき〔森君〕（女性）

十一月……遠い野原（女性）
十一月……鴨と月（赤い鳥）
十一月……秋の日（赤い鳥）
十一月……道ばた（赤い鳥）
十一月……傘のうち（コドモアサヒ）
十二月……寒い林（赤い鳥）
十二月……お茶の實（コドモノクニ）
修道院の前（三月二日作未發表）
海がらす（三月二日作未發表）
珊瑚樹（七月十二日作未發表）

昭和三年

一月……山茶花（赤い鳥）
一月……お籠に（赤い鳥）
二月……二月（赤い鳥）
三月……三月（赤い鳥）
三月……春の田（赤い鳥）
四月……春の海（赤い鳥）
四月……牡丹（赤い鳥）
五月……とんろん（コドモノクニ）
五月……ゆすろゆすろ（赤い鳥）
五月……梨の花（赤い鳥）
六月……月へゆく道（赤い鳥）
六月……木の芽どき（赤い鳥）
七月……ひきがへる（赤い鳥）
七月……あのころ（赤い鳥）
八月……月に（赤い鳥）
八月……お庭の夢（赤い鳥）
九月……あけび（コドモノクニ）

十月……船のおはなし（赤い鳥）
十月……筑波（赤い鳥）
十一月……ねこそぎ（赤い鳥）
十二月……からりこ（赤い鳥）

朝焼（三月三十一日作未發表）
入江には（四月二十日作未發表）

昭和四年

一月……お母さま（赤い鳥）
二月……梢（赤い鳥）
三月……霞のなか（赤い鳥）
三月……さうらんえ（赤い鳥）
三月……りんご（コドモノクニ）
五月……ひろねずみ（コドモノクニ）

附記

以上は發表の年月を示せるものであつて括孤内は所載誌名である。しかし本集中には「修道院の前」「海からす」「珊瑚樹等」の如く未發表のものも數篇あるが、それらは創作の年月日を記しとゞめて置くこととした。

追記

寫眞……父と隆太郎（昭和四年二月撮影）

繪圖……本書の繪圖はいづれも龜山巖氏の手に成る。同氏の繪は中世歐羅巴の藝術に見られるやうなはろばろとした空想を豐かにもつてゐる。『航海之圖』をはじめ中扉繪、表紙裝押繪をここにいたゞいたことはまことに忝い。

昭和四年六月十日印刷
昭和四年六月廿日發行

月と胡桃　金四圓五十錢

著者　北原白秋
東京市神田區北甲賀町四番地
發行者　坂口保治
東京市神田區錦町三丁目十七番地
印刷者　白井赫太郎

發兌　東京神田區北甲賀町四　梓書房
電話神田二七七五番　振替東京七八六四四番
發賣　東京神田區錦町一ノ一九　文修堂
電話神田三五九三番　振替東京五八七二番